

インタグコーヒー生産者協会の会長に就任して2年

AACRI

マルセロ・ヴェルガーラさんが直面する現実と希望



【今回お話をうかがったマルセロさん】

インタグコーヒー生産者協会（以下、AACRI）の会長、マルセロ・ヴェルガーラさんは、今年で就任して2年目。軍隊での勤務やレストランの経営、牛乳の生産者組合の運営など、経験豊富なマルセロさんだが、すでに多くの難題に直面している。森林農法によって鉱山開発から森を守ることを目指して設立され、今年で創立24年目を迎えるアークリの現状をマルセロさんに聞いた。

（文：ウインドファームスタッフ 和田彩子）

高齢化と若者離れ

約100世帯の生産者を抱えているAACRI（アークリ）。今一番の悩みは、「組織の高齢化です」と、マルセロさんは言う。初期のメンバーには、もう70歳、80歳をこえるという方もいる。しかし、その子や孫が必ずしも跡を継いで農家になつてくれるわけではない。「むしろ自分の両親が苦労してきた姿を子どもが嫌うと見てきています。だから、コーヒー栽培の肉体的、経済的な大変さは嫌というほどわかっているのです」とマルセロさん。

なおかつ親は子どもたちに良い教育を受けさせようと頑張ってきたという歴史もある。「コーヒー栽培によって収入と人生の選択肢を得ることができた結果、子どもたちは村を離れ、都市部で生活するというパターンが多いです。そのためコーヒーを育てる担い手が減ってきています」という。

コーヒー不足

AACRIの厳しい状況に、さらに追い打ちをかけてくるのが、コーヒーの仲介業者の存在だ。気候変動のため、世界的にコーヒーが不足している。激しいコーヒーの争奪戦が繰り広げられるなか、仲介業者はコーヒーを求めて車道もない道をものともせずやって来て、AACRIよりも高い買取価格を生産者に提示する。

生産者に農具や機械を無償で貸与したり、苗木を無料で配ったり、技術的なフォローを欠かさないようにすることで、インタグ地方に有機栽培や森林農法を普及させているAACRIだが、販売するコーヒー豆がないと、組織を運営することができない。コーヒー生産者のAACRI離れは頭の痛い問題なのだ。

新たな仲間たちと

しかし、そんな厳しい状況にあっても、マルセロさん

はAACRIの会長として、新たな生産者を増やすための取り組みが続けている。新規就農者が技術指導班やベテラン生産者のサポートを受けられる仕組みを準備し、さらに様々な研修や視察旅行などを企画することで、若い担い手を奮起させたのだ。その結果、今年、新しい生産者が15人もAACRIに加入した。

マルセロさんはこれまでの取り組みに手応えを感じている。「先日、ひとりの若者をイタリアへ視察に行かせました。彼はインタグコーヒーがイタリアで高い評価を受けていることに大変感銘を受け、自分もそういうコーヒー豆を作るんだ」という希望に満ちていました。

新規に就農した生産者は、一人につきコーヒーの苗木を3000本植える。コーヒーの木が実をつけるまで3年。最も生産量が増えるのが6年後。大きな収入もなく、それだけの期間

を栽培に費やしていくのは大変だ。でも、その頃までに全てが順調に進んでいけば、「1ヘクタールにつき、25俵以上の有機コーヒーを生産することができるとマルセロさんは予測する。

市場の広がり

また「現在、エクアドル国内におけるコーヒーの位置づけも変わってきています」とマルセロさんは言う。20年前エクアドルでは、誰もエクアドル産のコーヒーを飲む事はなく、目にするコーヒーは、ほとんどコロンビア産のインスタントコーヒーばかりで、国産の良いコーヒーは全て外国に輸出されていたという。

しかし今では、その辺の雑貨屋で

も、エクアドル産のコーヒー豆を売るようになった。カフェもマルセロさんの住む地域だけでも10軒はあるという。こうした変化を踏まえて、マルセロさんは国内の焙煎コーヒー市場の可能性を広げることを目指している。

コーヒー不足を解消し、自分達でカフェの運営ができれば、資金を貯め、もっと生産者に利益を還元する活動が可能になる。それができれば、「もっと多くの若者がコーヒー生産に従事し、森林農法を普及させて森を守っていける」とマルセロさんは確信している。自分たちのコーヒーに誇りをもち、その可能性を信じてマルセロさんは進んでいく。



日本へ出荷されるコーヒー豆



家族のようなAACRIのメンバーたち



子豚たちも
大切なサポーター